



筑摩世界文學大系

2

ホメーロス

呉 茂 一 訳
高 津 春 繁



イーリアス
オデュッセイア

筑摩書房

筑摩世界文學大系 2

昭和四十六年五月六日

初版第一刷発行

ホメーロス

訳者代表

発行者

呉 茂一
高 津 春 繁
竹之内 静 雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20602 (出版社) 4604

目次

イーリアス

呉 茂一 訳 5

オデュッセイア

高 津 春 繁 訳 295

『イーリアス』のなかのヘクトールとアンドロマケーとの別れ

エミール・ファゲ 井上 究一 郎 訳 463

『オデュッセイア』の余白に

ルメー ト 井上 究一 郎 訳 468

トロイアとモスクワ

ベス パ ロ フ 中 川 敏 訳 474

解 説

高 津 春 繁 479

ホ
メ
ー
ロ
ス

イーリアス

第一巻

疫病と憤怒のものがたり

憤り（の一部始終）を歌ってくれ、詩の女神よ、ペーレウスの子アキレウスの呪わしいその憤りこそ数知れぬ苦しみをアカイア勢に与え、またたくさんな雄々しい勇士らの魂を冥府へと送ってやったものである。そして彼らの屍はいえは、野犬だの、猛禽類（禿鷹や鷲）の餌食にされた、一方、その間に（大神）ゼウスの意図は成就されていたのだ、いかにもそれは、最初に武士たちの王であるアトレウスの子（アガ멤ノン）と、勇ましいアキレウスとが争いをおこして不仲になって以来のことである。だがいったい、神々のうちの、どのかたが、この二人を向かいあわせて闘わせたのか。レートとゼウスとの御子（アポロン）である。その故は、彼が国主に対して立腹され、（アカイア軍の）陣中にひどい悪疫を起こしたので、兵士らはどんどん斃れていった、そのもとは

といえば、アトレウスの子（アガ멤ノン王）が、（アポロンの）神官であるクリューセースを侮辱したからである。その次第はといえば、はじめに彼がアカイア軍の速い船（の引き上げで置いてある陣地）へ来た、それはおびたらしい身の代を持って、（アカイア軍に捕えられて）自分の娘を贖いたいという考えで、手には遠矢を射る御神アポロンの神聖なるしの毛総を上につけた黄金の杖をたずさえ、並みいるアカイア軍の大將たちみなに懇願した、中にもとりわけ、兵士らの統領であるアトレウス家の二人の王に向かってである。（それで、いうようには、）

「アトレウス家のかたがた、またその他の、立派な脛当てをつけたアカイア勢の殿がたよ、願わくはあなたがたに、オリュンポスに宮居をたもちたまう神々が、ブリアモスの城市を攻め取ることをお許しのように、そして無事に故郷へと帰り着かせてくださるように。だが、私の娘は、どうか私に返して、代りにこの償い代を受け取ってください。ゼウスの御子なる、遠矢を射たもうアポロンの神威を畏れて」

（三）
こういうと、他のアカイア軍の將たちは、みな声をそろえて、賛成をし、神官に敬意を表してきざらしい償い代を受け取れとすすめたが、アトレウスの子アガ멤ノンだけは、これにたいそう機嫌を悪くし、神官に侮辱を加えて追いつ返して、暴言を吐いていうよう、

「このうえおまえに、この私が、うつろに削った船のかたわらで、出会わんようにするがいい、

現在ぐずぐずしていたり、あとでまたやって来たりしてな。そしてたもう、御神の笏杖とて、総とでも、身の護りにはなるまいから。ともかくあの娘を私は返してはやらんぞ、すっかり彼女が年を取らないうちはな、私が居城に、故郷からは遠いアルゴスの地にいて、機を動かしかし織りつつけ、また私の寢床の世話をして日を送るうち。だから、さあ、帰れ、私を怒らせるななるべく無事に帰りたいなら」

こういうと、老人はこわくなって、王の言葉に従いはしたが、それから、ごうごうと鳴りとどろく海の渚へ、黙りこくって歩いてゆくと、人気がないところへいつて、その老人は、アポロン神へと、心をこめて祈りつづけた、髪の毛の折れりをお聴きください、銀弓の神よ、クリューセーの町に護りをめぐらせ、神聖なキル

（一） 芸文の神ムーサをさす。
（二） アキレウスはデッサリアのプテイーネ地方の領主ペーレウスと海の神ポセイドンの子。

（三） 前千年代の初め北方からギリシア半島に侵入、先住民と混血して定住し、のちミケナイを中心として勢力をふるった民族。
（四） アルゴスの都ミケナイの王で、スパルタ王メネラオスの兄、いま弟のため仇を報じようとトロイエー遠征の軍をおこした。遠征軍の総大將である。

（五） レイトは小アジアの大神神ラーダー（レーダー）と同一神と考えられ、その子アポロンも元来は小アジア系の青年神で予言の力により広く尊崇された。そのためか、つねにトロイア方に味方する。
（六） 小アジア西北部トロイアス（トロイア）地方の古都イーリオスの王。

ラやテネドスを殘威も高くお治めになるスミンテウスよ、かつて私が御神へと、神殿の屋根を葺いてさしあげ、また本当に、肥えた牡牛や山羊の腿の供物を、焼いてまつたことがあるなら、この願ひをかなえてくださいませ、ダナオイ勢が、御神の矢（の威勢）によつて私の涙のつぐのいをいたしますよう」

（三三）

こう折りながら言つた、その言葉を、ポイボス・アポローンが聴かれると、オリュンポスの峰々から降りて来られた、心に烈しい怒りをもやして、両肩には弓と、しっかりと蔽いをつけた熊（くま）をかけたまわしておいでだったので、神様が体を揺すって歩みを運べば、ひどく怒つておいでなもので、その肩のへにはたくさん箭が、からからとひびきを立てた。御神はさながら夜のごとくに、いゆきたもした。それからして、船陣から離れたところに御座を占めると、矢を引き放たれる、銀づくりの弓からは、恐ろしい轟音が湧き起こった。まず最初には驟馬や、足の速い犬どもを、矢は襲つた。それから今度は兵士ら自身へと、鋭さをもつ矢弾を御神はつぎつぎに放つてお当てになれば、（疫病の矢に斃れた兵士の）屍を焼く火は引きもきらずに燃えつづけた。

九日のあいだ、このように御神の請は、陣中をくまなく襲いつづけた、その十日目に、会議の場へと、武士たちをアキレウスが呼び集めた。というのは、彼の心に、（そういう考えを）白い腕の女神ヘレーが、起こさせたからである。つまり女神はダナオイ勢がどんどん斃れてゆ

くのを見て、気づかれたのであった。さて人間が集まって来て、一つところに寄り合つたとき、皆の間に足の速いアキレウスが立ち上がって、こういいかけた。

（三四）

「アトレウス家の王よ、今はもうわれわれも、撃退されてしまつてからは、故国へと引き返して戻るほかないと思う、もしわれわれが死を万一にも免れてもな、まったく戦いと悪疫とが一緒になつて、アカイア軍を負かそうとかかるならば。ともかく、さあ、誰か占いや、神主か、あるいは夢占いやする者なりに訊ねてみようよ、夢というのは、ゼウス大神のもとから遣わされるものなのだから。そしたら彼がどうしてこんなにポイボス・アポローンが激怒されたかいつてくれよう、もしやわれわれの祈りについてか、または大賢につき苦情をお持ちなのか。それで、あるいは仔羊や申し分なく育つた（犠牲）の山羊の脂身を焼いた煙を受けたもうて、悪疫をわが軍から追い払つてくださるつもりはお持ちでないか、（いつてくれよう）」

こうアキレウスはいい終えて腰をおろした、すると皆の間にテストールの子、カルカースが立ち上がった、鳥占師のうちでもとくに第一人者といわれる者で、現在のこと、未来のこと、また以前にあったことにもよく通じていて、アカイア軍の船隊を自分の占ひ術によつてイーリオスの奥まで導いて来た者である。その占ひの術はポイボス・アポローンが授けたもうたものだった。その人がいま、みなみなのためと思つて、会議の座に立ち、説いていうには、

「おお、アキレウスよ、ゼウスに親愛されているあなたが、遠矢を射たもうアポローンのみこととお腹立ちのゆえを語れと命じられるのだから、私はいおうと思う、だが、あなたはよく氣をつけて、誓ってください、本心に心をこめて言葉と腕と、両方でも、私を防ぎ護つてくれよう。それというのも、これから私はある人物を怒らすことか、と思うからだ、その男とは、アルゴス人のごとくを、大層な威勢で従がえ、アカイア軍も服従している人物である。ところで、国の領主というものが、位の低い人間に腹を立てた場合には、いっそうきびしいのが常なのだ。それでその当日は憤りを強いて抑えて過ごそうとも、ずっと後にも恨みを自分の胸に含んでいるのだ、それをはらしてしまふまでは、それゆえ、あなたが無事に護つてくれるよう、思案してください」

（三五）

これに答えて、足の速いアキレウスがいうように、

「安心してどんどんと、何でも知っているかぎりの、神のお告げをみない方がいい、けして、ゼウスがおいつくしみの、アポローンにかけて、そのかたに、カルカースよ、いともきみが祈りをささげて、ダナオイ勢に神託を明かし伝えるのだから、けして私が生きてゐる限り、この眼の黒いあいだは、うつろに刻つた船のかたわらで、ダナオイ勢全体の誰一人にも、きみに対して暴力はふるわせまい、よしとえアガメムノンというとてもだ、その人は今、アカイア軍じゅう、断然人にごえて大きな威権を誇るもの

ではあるが」

すると、その時はじめて、元氣を出して、この立派な予言者は口を開いた。

「いや、べつに、御神は祈りのこととか、または大賛につき、とやかく苦情をお持ちなのではない、あの神官のためにである、その人にアガムノーンが恥辱を与え、娘を返してやりもせず、身の代を受け取ってもやらなかった、そのために遠矢を射る御神は、苦難をわれらに与えたのだし、またこれからも与えられよう。それでなおまだ、あのきらきらした眼の乙女を愛しい父（神官）に返してやらぬそのうちは、見苦しいあの悪疫を取り除いてはくださるまい、それも無償で身の代金も受け取らずに（返してやって、御神には）、聖い百牛の大賛をクリューセーへと持ってかなければ。そしたら、はじめで、われわれも、神意をなだめることができよう」

いかさま、彼はこういい終えると、腰を下ろした、すると皆に向かってアトレウス家の殿が立ち上がった、広大な国を治めるアガムノーンだが、不快の面に、胸中ごとく烈しい怒りていっぱいにまっ黒とさせ、両眼は燃え輝く火をさながら、まず第一にカルカースへ向け、禍々しい眼でにらみつけいうようには、（三）「おまえは、悪いお告げばかりを知らせる、これまでかつて嬉しいことは、何一ついってくれない、おまえは悪い、いつだって、おまえは悪い、占いばかりをして喜んでいて、善いお告げなど、かつて一度もいっても、しても、くれたことが

ない。今度だとしても、おまえは、ダナオイ勢に、ご神託を伝えるのだとて、わが軍に遠矢を射る御神が苦難をお与えなさるのには、まったく私が乙女のクリューセーイスを抑留して、立派な身の代のものを受け取ることを承知してやらなかった、そのためだという、それは私がぜひとも娘を手もとに置きたいと思っているからだ。が。本当に私としては、定まる妻のクリュタイメーストレーよりも好きなくらいだ、彼女にくらべて、背丈でも手足の姿も、また気だてといい手の技といい、ひけをとるところはないのだ。だが、それほどながらも、帰してやることにしよう、そのほうがよい、というなら、私としては、つわものどもが死ぬことよりは、無事であるのを望むからだ、それならば私のために、すぐさまにも、（代りの）褒美のものを用意してもらいたい、私だけが、アルゴス勢のうちでひとり、何も褒美を貰っていないのでは正當といえないから。私のもらった褒美がよそへ、いつてしまるのは、皆々もいままよくごらんのとおりなのだ」（三）

それに答えて、今度は足の速い、勇士アキレウスがいうには、

「アトレウスの子よ、あなたは皆々以上に誉れも高いが、また物欲もいちばんに深いほうだ、どうしてあなたに、心の大きいアカイア勢が、褒美を（見つけて）さしあげられよう。もうまったく、どこにも皆で共有の財がどっさり置いた品物はみな、もう分配してしまつたのだから、

兵士たちからそれをまた返して、元へ集めさせるのは面白くない。ともかくあなたは、いまその娘を、神様にお返しなさるがいい、そしたら今度はアカイア勢が、三倍にも四倍にも、その償いをするのだらう、もしも将来ゼウス大神が、トロイアの、立派な城壁をもつ城市を攻めおとさせてくださるうなら」

これに答えて、アガムノーン王がいうようには、

「神にもたぐえられるアキレウスよ、まあきみは勇士だらうが、けしてそんなふうには、だまそうと思つてはならぬ、とうてい私をいにくるめも説きつけもできないからうから。いかさまきみは、自分は褒美を貰っているのに、私は何も貰わずに、おとなしくして坐っているやれと命じうんだな、それで私に娘を返してやれと命じうのか。それなら褒美を、心の大きいアカイア人らが、十分前のと引き合うくらいにくれるなら

（一） アポロンの別名、おそらく小アジア系の野鼠を意味する語と関係する。クリューセーもキルラもトロイアス地方の小市、おそらくアポロンの崇拜の中心が。テネドスは西に浮かぶ小島。

（二） アカイア勢（アカイオイ）とほぼ同義。

（三） ポイボスはアポロンの異称の一つ。「光り輝く者」という意味。アポロンは、ほかに「銀弓の神」「遠矢を射る神」などの別称が多い。

（四） 本来はアルゴス地方の大地女神が主女神で、ヘーシオドスの「神統譜」以下はゼウスの姉妹でその妃とされる。

（五） アカイア軍に随行した予言、占筮の第一人者。

（六） アポロンの神官、クリューセーの娘。もとともアキレウスが捕虜として連れてきたのをアガムノーンが奪ったことから、二人の不和がはじまる。

よし、もしまた十分よきさん場合は、私が自身で取り立ててやるぞ、きみの分け前なり、アイアスのなり、またオデュッセウスの分け前なりを取って来てやる。私にやって来られた男は、さぞ腹を立てることだろうがな。だが、まあそのことは、いずれまた後でゆっくり考えるところ、今はさあ、黒い船を、かがやく海へと曳き下ろさせよう、その中へは漕ぎ手たちをほどよくそろえ、百牛の大寶も載せてやろう、それから頼の美しい乙女、クリューセーイスその人、相談役の大將が、指揮官として乗ってつてくれ、アイアスなり、イードメネウスなり、または貴いオデュッセウスなり、それともきみなりがだ、ペーレウスの子の、すべての武士たちの中でも、いちばん恐ろしい人間だが、われわれのため祭を執りおこなって、遠矢の御神をなだめまいらさう」

(二七)

すると、王を下目づかいににらみながら、足の速いアキレウスが向かっていうよう、

「なんだと、厚顔無恥の、するかしこく儲けばかりをねらうのだな、そんなきみのいうことにどうして進んで、アカイア軍の一人でもが従うものか、遠いところを出かけろとか、敵の武士と奮戦しろと頼んだにしろ。私だとても、決してトロイア方の槍を扱う武士たちのせい、ここへ戦さしようとか来たのではない、格別私が彼らを恨むかとはないから。これまでけして私の牛の群れだとか馬だとかを、彼らがさらっていったことも、また土塊の沃かに、武士たちを

育てあげるプテイーエの郷で、実った畑を荒らしつくしたこともないのだ、その間には鬱蒼として大層もない山脈だの、とどろきわたる大海だのがあるのだから。そうではなくて、ただあなたと一緒に随ってきたものなのだ、恥も知らないあなたを、喜ばせようとはかに、メネラーオスと、犬（みたいに恥知らずな）顔をしただなたのため、トロイア人に償わせようと骨折るつもりで、それらのことを、一切あなたは顧みもせず、気にもかけないで、今度もまた自分から来て私の褒美を奪い取ろうと脅しつけるとは。それを獲るのに、大変苦勞をしたことだし、それで私にアカイア人の息子たちがくれたもののなに」

(二八)

「第一これまで、あなたと同等な報償を貰った覚えがない、いつだってもアカイア勢が、トロイア方の、景勝の地に位した城市を攻めおとした場合に。しかも激しい合戦のおおかたは、私の腕がやりとげるのだが、いよいよ（獲物の）分配となると、あなたが貰う分け前のほうがずっと大きく、私はわずかにだいいじにかかえて、船陣へと帰っていくのだ、戦いつづけて、くたびれたうえは。だが、今度という今度、私はプテイーエに帰っていくぞ、舳のまがり上がつた船を率いて故郷に帰ったほうが、ずっとましだから。もうこの処に侮辱を受けながら、あなたのために富や財を積みあげてやるつもりはない」

それに答えて今度は、武士たちの君アガメムノーンがいうようには、

「どんだん勝手に逃げていけ、きみの心が急ぎ立てるなら、私としても、自分のために、とどまってくれと頼みはしない。私にはまだ他の人たちがついていて、大切にもしてくれようというかたがたがな、第一、知謀の御主ゼウスから領主のうちでも、いちばんに憎たらしい男だぞ、きみときたらしじゅう争いとか、戦争だとか、合戦だとかを好いて。いかにもきみは剛勇だろが、それはまず御神の賜物といわねばならない。故郷へ船なり手下の勢なり引きつれてつて、ミルミドノンを治めるがいい、きみのことなど私はてんで気にもかけない、恨んでいようと平氣の平左だ。ただこれだけは、ぜひとも実行するぞ、ポイボス・アポロンがクリューセーイスを私のところから奪ったように、——その娘はこれから私が自分の船で、私の仲間に送らせようが、——私としても、自分でこれから陣屋へいって、きみが褒美として受けたプリーセーイスを、連れて来てやる、それは、どれほど私のほうがきみより力が強いものか、よくよくきみにもわかるようにだ、そうなれば他の大將とても、私と同じにえらぶったり、面と向かって肩を並べたりすることをばかろうから」

(二九)

こういうと、ペーレウスの子（アキレウス）は、憤然しさにのどもふさがり、荒毛の生えた胸の奥の心臓は二つにわれて、あれこれと思ひ惑った、鋭い剣を腰のわきから引き抜いて、大將たちを立ち上げらせ、アガメムノーンを斬り

殺そうか、それとも憤怒をおしとどめ、いきり立つ胸を抑えたものかと。ちょうど彼がこのようなことを胸の奥、心の中でとやこう思いはかっていたとき、そして大きな刀を鞘から抜こうとした折しも、アテーネー（女神）が大空から降りて来られた、つまり白い腕の女神ヘーレーがお遣わしになったのである、二人ともを御心にかけ、いとしく思っておいでたもので。ペーレウスの子のうしろに來て立ち、亜麻色の髪をひつつかまえた。（その姿は）アキレウスだけには見えだが、他は誰にも見えなかったのだ。アキレウスはびっくりたまげて、うしろを振り返り、すぐとそれがバラス・アテーネーだと悟った、女神の両眼は恐ろしく輝いてたのでそこで女神に声をかけ、翼をもった言葉はいいあげた。

「どうしてまた、やってこられたのです、アイギスをお持ちのゼウスの御娘が、アトレウスの子アガメムノーンの非道の振舞いをごらんになろうとおっしゃってか。それなら、あなたに言っておきましよう、またこのことはかならず成就されようと思うのですが、彼はまもなく、自分の傲った心ばえゆえ、いつかそのうち命をなくすことでしょうよ」

それに向かつて、今度はまたきらめく眼をした女神アテーネーがいうには、

「私はおまえの立腹を止めようとして天からやって来たのだ、もし（私の言葉を）きいてくれるならね。私をおよこしなされたのは、白い腕の女神ヘーレーで、両方ともを御心にかけ、氣

つかわれてのことなのだから、さあ争いは中止して、剣を手に引き抜くのもやめにしなさい。それよりも口先だけで非難してやるがいい、どうあろうとてね。それというのも、こうはつきりといってやろう、またこのことはかならず実行されようからね。それでいつかは、おまえも、いま蒙ったひどい仕打ちのつぐないとしてこの三倍ほども立派な輝く宝を貰えるだろう。それゆえ今は胸を抑えて、私たちのいうことを聴いたがいい」

そこで女神に向かつて、足の速いアキレウスが答えていうよう、

「それはもとより、お両神さまの仰せは守らねばなりません、女神よ、よしたとえ、どんなに胸が憤りのため煮え返ろうとも。そのほうが良いことなのですから。神々のみことを素直に聴くものならば、神々もまたその人の願いを容れておやりといひます」

こういつて、銀づくりの柄のところに、重々しい手を控えとめた、それで鞘へと大きな剣を押し戻したのは、アテーネーの御命に素直に従ったのである。女神はそのまま、オリュンポスをさしておいでになり、アイギスを保つゼウスの宮へ、他の神々の間へと帰還された。（三三）

一方、ペーレウスの子（アキレウス）は、それからまたもや、容赦ない言葉でアガメムノーンをのしりつづけ、いつころ怒りを抑えようとしなかった。

「あなたは、酒びたしで重くなつて、顔といったら（恥知らずな）犬のよう、心臓は鹿（み

たいに臆病）な男だ、まだ一度だつても戦さへと、兵士たちと一緒に鎧をつけて出かけることも、またアカイア勢の大將たちと、待ち伏せに往くことも、思い切つてできないとは、あなたには、それが命にかかわるように見えるものだ。いかさま、アカイア軍の広い陣営にすっこんでいて、自分に楯を突くような人間から、貰った褒美を取り上げるのは、それよりずっとたやすいことだ。国民を食ひものにする領主だ、ものの数にもならぬやつらを家来にしているからだろうが、アガメムノーンよ、人に侮辱を与えるのも、これがもう最後だぞ。

「ともかくはつきりいつておこう、また重い誓いにかけて誓おう、いや、この杖にかけて、これはもはや、葉も枝も生やせまい、まったく一度、山間で木の切り株を離れて来てから、もうはや芽を出し繁りはできなからう。ぐるっとまわりの木の皮や葉を、青銅（の斧）が剥ぎ取ってしまったからは。それを今度はまたアカイア人の息子らが、裁きをするとき、てのひらに持つならわしになっている、ゼウスの御前で、^{おま}疵

(1) 北ギリシア、テッサリアの中央部の地で、アキレウスの故郷、その領国であった。

(2) 船の形容詞の一つで、船の前後がそりあがつて鳥のくちばしのように曲つたのをさす。

(3) アイギスは本来、「山羊皮」で、山羊の毛深い皮で作つた原始的な櫛であるが、ここではゼウスの雨雲の乱れが、黒い山羊皮のように天に垂れ下るのやうと考えられる。ゼウスによく用いられる形容。

(4) 女神アテーネーのもつとも普通の形容詞、「ふくらむの眼」という解釈もある。

を護るつとめの者がだ。それゆえ、(この杖にかけて誓った)この誓いは、重大なものといえよう。きつといつかは、アカイア人の息子たちが一人残らず、アキレウスがいてくれたら、と考える時が来よう。どんなにあなたが胸を苦しめようとも、何も譲りになるものを見つけないことはできないだろう、武士を殺すヘクトールの手にかかって、大勢の者が命を落し、どんどん倒れていく折には。それであなたは、心中、腹を立てながら後悔するにちがいない、アカイア軍中第一の勇士をちつとも大切にしなかったことを」

こうアキレウスはいうと、杖を地面に投げつけた、黄金の鉈をいくつも打ちつけた杖である、そして自身は腰を下ろした。一方、アガメムノンもこちら側では、依然として腹立ちつづけていた。すると、二人の間に弁舌の巧いネストールが、勢よく立ち上がった。声量ゆたかな演説家として、ビュロス勢のかしらである。その人の舌端からは、蜜よりもっと甘くやさしい文句が流れて出る(といわれた)。また彼は、言葉を用いる人間のはや二世代を見送って、いま三代目の人々を支配しているところだった、つまりきわめて神聖なビュロスの郷で、以前に彼と一緒に大きくなった人々とそれから生まれた人々との二世代を見送ったのだ。そのネストールがいま一同のためをおもんばかって、会議の席に立ち、みなに向かつていうよう、

「やれやれ、何たることか、大変嘆かわしいことが、アカイア人の国に対しておこったものだ。

まったく(敵方トロイアの王)ブリアモスやブリアモスの息子たちが喜ぶだろうな、また他のトロイア人たちも、心で大喜びをすることだろうよ、あなたがた二人がこういひがみあっている次第をそっくり聞き伝えたなら、ダナオイ勢の中でも、はかりごとにかけても、戦さにかけても、超えすぐれている二人がだ。まあ(私の言葉に)従いなさい、あなたがたは、二人とも私よりは年も若いのだから。というのも、以前に私は、あなたがたよりさえも、超えすぐれていた勇士たちと交わりを結んでいたが、彼らはけして私を軽んじなどしなかった。いや、まったくあんな侍たちは見たことがない、またこれからとて見はすまいよ。ペイリトオスとかドリュアースとかいう、兵士たちの統率者、それにカイネウスやエクサデイオスや、神にも比すべきポリリュペーモスや、さらにはアイゲウスの子テレーウスなど、この男は不死の神々にもたぐえられる人物だった。

(三三)

その人たちは、この地上に住む人間のうち、とりわけて剛勇無双の者として生い立った、剛勇ならびがなく、また剛勇無双の者どもと戦さをしていた、山間にすまうケンタウロスたちとであるが、その者どもを手ひどく討ち取ったものだ。しかもこの人々と私は、ビュロスから、遠いアビアの郷から来て、親しく交わりをつづけたものだった。彼らがみずから呼び寄せたのでな。しかも私は、自分ひとりで闘っていた。だが、彼らとは、とうてい現在この地上にいる人間の、誰一人として、闘い合えようとは思えない。

ない。それなのに、彼らは私の立てるはかりごととに耳をかし、私の言葉に聴き従ってくれたものだ。

「それゆえ、あなたがたもまあ、いうことをききなさい、きくほうが得なのだから。まあ、あなたのほうも、よし優れてはいようと、こなたから乙女を奪いとうろとなさるな、アカイア人の息子たちが、はじめにこなたへ褒美にくれた、そのままにしときなさい。またあなたも、ペーレウスの子よ、国の主と対抗して争おうなど思ってはならない、それというのも、王笏をもつ国の王は、ゼウスが誉れをお授けになったもの、けして他人の及ぶべくもない尊敬を天から頒ち与えられている。それゆえ、たとえあなたが剛勇のつわもので、生みの母は女神だといつても、こなたのほうが位は上なのだ、もつと多くの人の支配者なのだから。またアトレウスの子よ、あなたのほうは、その立腹を抑えるがいい、もしたら私が、アキレウスにも怒りを捨てるように頼もう、なにしろ彼はすべてのアカイア人らにとつても、わざわざいな戦さから護ってくれる大きな壻(きぶ)なのだから」

(三四)

これに向かつて、アガメムノン王が答えていうには、

「いかにもまったく、老人よ、あなたがいわれたことはみな、筋のよくとおったことだ。だが、この男は、他の人々をみなしのごうと思っている、誰彼をもみな自分に従わせ、誰彼をもみな支配しよう、すべての者に号令しようと考えてるが、そんなことは、とうてい私はきくわけ

にはゆくまいだろうさ。たとえば彼を、常住にいたまう神々が、ひとかどの武士となされたといつて、それだからとて、すぐ、勝手なことをいつてもよいとなさつたわけではあるまい」

すると、それをささげるように、勇ましいアキレウスは言葉を返して、

「いかさま、臆病者とも、ろくでなしとも、私は呼ばれていいことだろう、もし万事につけてあなたがいうどんなことにも譲歩しつづけていたとしたら。いや、そんなことは他の者にいいつけたがいい、私はともかく指図を受けないから。もうこのうへは私ははけして、あなたなどには従うつもりは一切ないのだ。もう一ついいおく、よくそれを胸におさめて覚えていろ、腕力では、けして私はあの乙女のために闘うことはしないだろう、あなたとも、他の人とも。それは私にくれた者が、また取っていくのだからだが、黒塗りの速い船のかたわらに（ある陣屋に）私が持っているすべてのもの、その一切の一つだとして、私の承諾なしに取って持つてくことは許さないぞ。いや、ほんとうに、ちょっとでもやってみる、すぐ皆にもわからせてやる、すぐさま血が黒々と、槍のまわりにはしようといふことを」

（三〇三）

かように二人は、対抗して烈しい言葉で、争いながら座を立ちあがり、アカイア勢の船陣のかたわらで開いた会議を解散した。ペーレウスの子は陣屋のほうへ、釣合ひの取れた船へと、メノイテオスの子（パトロクレース）や、その他、仲間の人々を連れ、出かけていった。一

方、アトレウスの子はいえは、速い船を海へと引き下ろさせ、中へと二十人の漕ぎ手を選び、すぐつて、百牛の大贄を御神のため載せ込んでから、美しい頬をしたクリューセーイウスを連れて来て坐らせた。また統率者には、知恵に富んだオデュッセウスが乗つていった。

それから、一行は、船へ乗つて渺々たる潮路を航らせていった、一方、アトレウスの子は、兵士たちに、潔斎をし汚れをすすぎ浄めろと命令した、そこでみなみな汚れをすすいで、海へとけがれを投げ入れてから、アポローン神へと、申し分なく立派な、牡牛だの山羊だのの大贄を、荒涼として荒れはてた海の渚のほとりであつたまづつた。その脂身の焼ける匂いは天へ、とぐるぐるの煙の輪を描いて上つていった。

このように人々は陣屋をあけて働いていた、その間もアガメムノーンは、さつき初めにアキレウスを脅していった争いをやめようとせず、タルテュビオスとエウリュピテースの二人に命じていった、この二人は彼の伝令使でまた忠実な従者だったものである。

（三二）

「ペーレウスの子アキレウスの陣屋へいつてこい。手を取つて、美しい頬をしたブリーセーイウスを連れてくるのだ。万一にも渡さなければ、私が自身で大勢の者を率いて出かけ、奪つてこよう、そしてららっそ、あいつは、ひどい目を見ることだろうが」

こういつて（二人を）遣わした、きびしい言葉をもじつたものである。そこで二人は、しぶしぶながらも荒涼として荒れはてた海の渚を進ん

でいつて（アキレウスの部下）ミュールミドーン族がいる陣屋や船のある場所へやつて来た。そして彼が陣屋のわきの、黒い船のかたわらに坐つているところに出会つたが、もとより二人を見て嬉しい顔は見せなかつた。一方、二人のほうでも、ちぢみあがつて、国の主（アキレウス）を畏れ敬つて立ちすくみ、何も彼に向かつて物をいえず、訊ねることもできずにいた。しかしアキレウスは胸のうちによく事の次第を語り知つて、二人に向かつて声をかけた。

「よく来た、伝令のかたがた、（あなたがたは）ゼウスのお使い、また人間界の知らせを伝える者なのだ、もつと近くに寄りなさい、けして何もあなたがたに悪いところはない、アガメムノーンだ。彼があなたがた二人を、乙女ブリーセーイウスのため、よこしたのだから。では、さあ、ゼウスの裔であるパトロクレースよ、乙女を連れ出して来て、このかたがたに連れていくよう渡してあげろ。だが、あなたがた二人も、自身で証人になつてくれ、祝福された神々の御前でも、やがて死ぬ人間たちに対しても、また非道な国王に対しても、いつかまたきつと、他の人々をあさましい破壊から防ぎ護るために、私の助けが、ぜひとも入用になつた場合に。まったく王は、呪われた心でもつていきりたち、前後

（一） テッサリアのラビダイ族の王で、その山地に住む原住民、伝説では半人半馬の姿を有するケンタウロイと戦つてこれをやぶつた。

（二） *arrestos* の意訳。「不毛な」とか「休まなく絶えず動く」とか解されてきたが、由来が明らかでない。

の思慮もすっかりなくしてしまっているのだ、
 どうしたら船陣のかたわらでもってアカイア勢
 が安全に戦えようか、ということも」

（四）

こう彼がいうと、パトロクロスは親愛する友
 の言葉にすぐさま従い、陣屋から美しい頬をし
 たブリーセーイスを連れ出して来て、連れてい
 くよう二人に渡しした。二人はまた、アカイア軍
 の船陣へと向かつて帰れば、女も、進まぬなが
 らも、伝令使たちと一緒に出かけた。一方、ア
 キレウスは、（抑えていた）涙を流すと、すぐ
 仲間からひとり離れて引き退き、灰色をした海
 の渚に坐り込んで、涯しのない海原のうえを眺
 めいった。そして両手をさし伸べて、いとし
 い母（なる海の女神テティス）に向かい、しきり
 に祈った。

「母上、あなたが私を、ほんのわずかの間だけ
 生きているようお産みでしたからには、ともか
 くも名譽だけは十分私に、オリュンポスにおい
 での、高い天に雷をとどろかすゼウス御神も与
 えてくださるはずでした。ところが今、大神は
 まるでちっともだいじにしてはくれなかったの
 です。まったく私を、アトレウスの子の、広い
 国を治めるアガ멤ノーンは侮辱したのですか
 ら。だって、彼は自分のほうから、私の貰った
 褒美を奪って、取ってつたのです」

こう涙を流していうと、その声を深い海の底
 で、父である（海の）老神（ネーレウス）のわ
 きに坐っていた母の女神が聞きとめた、そこで
 すぐさま、またたくひまに灰色の海から、霧の
 ように立ち、のぼって出た。そして、アキレウ

スその人の前に坐った、まだ涙を流している息
 子の前に坐ると、手で撫でさすって、名を呼び
 言葉かけた。

（五）

「私の子よ、何を泣いているの、どういう嘆き
 がおまえの胸に來たというのかえ、いっておい
 まい、心にくしくしておいてはいけない、私もお
 まえも、二人ともよくわかるように」

すると母神に向かつて、ひどく嘆息しながら、
 足の速いアキレウスがいうようにには、

「わかつているくせに、どうして、それをみな
 すっかり知ってる母上にお話することがあり
 ましょう。私たち（アカイア勢）は、エーエテ
 イオーン³の聖い居城のテーベーへと押しかけて
 ゆき、城を攻め落してから、獲物はそっくりこ
 こへ運んで來ました。それを、アカイア人の息
 子たちは、自分らの間でもって、しかるべく分
 配しまして、アトレウスの子（アガ멤ノーン）
 へは、美しい頬をしたクリュセーイスを選び
 出して与えたところが、（その父親で）遠矢を
 射たもうアポロンの神官をつとめるクリュ
 セーイスが、青銅の帷子^{よろい}を着たアカイア勢の速い
 船（が引き上げてある）ところへ来て、娘を贖
 いたいというので、たくさん身の代を持って
 來ました。手には遠矢を射る御神、アポロン
 の神聖なしるしの毛縋^{けり}を上につけた黄金の杖を
 たずさえ、並みいるアカイア軍の大將たちみな
 に懇願しました、とりわけ兵士らの統領である
 アトレウス家の二人の王に向かつてです。
 「その折、他のアカイア軍の大將たちは、みな
 声をそろえて賛成し、神官に敬意を表して、き

らからしい償い代を受け取れとすすめましたが、
 アトレウスの子アガ멤ノーンだけは、これに
 たいそう機嫌を悪くし、神官に侮辱を加えて追
 い返しました。老人は腹を立てたまま帰って
 いた、その祈ることをアポロン神がお聞き入
 れになりました。もともと大変ひいきにしてい
 たからです。そこでアルゴス勢に向かつて御神
 は禍いの矢をどんとんと放たれたので、兵士た
 ちは次から次へと死んでいきまされた。御神の死
 の矢は、アカイア軍の広い陣営中にくまもなく
 おとずれたのです。それでわれわれのため、事
 由をよく心得た占い師が、遠矢の御神の神託を
 説きあかした。

「すぐと私は先に立つて神意をなだめまつるよ
 うにとすめたところが、アトレウスの子（ア
 ガ멤ノーン）が腹を立てて、いきなり立ち上
 がると、私を脅かしつけていました、そのこ
 とがいま、実際に遂行されたわけなのです。そ
 の娘（クリュセーイス）はいかにも、速い船
 に載せて、眼のきらきらしたアカイア人らがク
 リュセーへと送っていき、御神へも獻げ物を
 持つてきました。また今しがた、伝令たちが
 （やつて来て、私の）陣屋からあの娘、アカイ
 ア人の息子たちが私にくれた、あの乙女ブリー
 セーイスを、連れていったのです。それゆえ、
 もし母上がおできならば、自分の息子をかばっ
 てください。オリュンポスへいって、ゼウスに
 頼んでみるのです。もし本当にあなたが、言葉
 なりまたしたことなりで、ゼウスの心を喜ばせ
 ておいたというなら、だつてたびたび（まだあ

なたが）父上の館においでだった時分に、得意になつておっしゃるのを聞いたものです。あなたが、あの黒雲（を寄せる）クロノスの御子（ゼウス）のために、不死である神々のうちただ一人して、ひどい辱しめを防いであげた、という話を。それはゼウスを、ほかのオリュンポスにおいでで神々が縛りあげようとなさった折のことでした、ヘーレーやポセイドーンや、またパラス・アテネーなどがです。

「それをあなたは、女神の身として、出かけていつて、ゼウスの縛しめをこつそりほいてさしあげ、すぐさま百腕の怪物を高いオリュンポスへと呼んできました、神様がたはブリアレオンと、人間どもはみなアイガイオンと名づける怪物でもつて、その腕力では、自分の父（ウーラノス）よりまともと強いという、それがクロノスの子（ゼウス大神）のわきに意気揚々と侍っているの、祝福された神々もおじけをふるつて、それ以上はもう縛るのもあきらめたという、その折のことをゼウスに今、思い出させ、そばに坐つて膝にすがり、なんとかしてトロイエー方の加勢をする気になり、アカイア勢を船の舳や海のほとりへ押し込めてから、どんどん殲されていくよう、おはからいを願つてくたさい、誰もかもあの王様の有難味が味おえるように、またアトロエウスの子の、広大な国を治めるアガメムノーンも、自分のひどい思い違いを悟れるようにです、アカイア軍中で、一番の勇士をすくしも重んじなかったことを」すると、テティスは私の私に、涙をさめさめ

と流しながら答えていうよう、

「まあかわいそうな私の子よ、どうしてまあおまえを育てあげてきたのか、かなしい運命におまえを産みつけながら、できることなら、おまえが船陣のかたわらに、涙も知らず悩みも受けずに坐つていられたら嬉しいものを、おまえの寿命はほんの束の間、けしけし長くは保たないとかわっているのだから、それが今では、誰よりも短命な上に、また痛ましい目にあおうとは。いかにも不運な身の上に（父上の）館の中で産みつけたものです。ではこの次第を、雷鳴をとどろかすゼウス神に、これから自身で、深い雪をいただくオリュンポス山へといつてきましよう。承知してくれるか、ひとつやつてみに。『だがおまえは、進みの速い船陣のかたわらに坐り込んだまま、アカイア勢を恨みつけ腹を立ててはいても、戦さには全然手を出さないで控えていなさい。それというのも、ゼウスさまは、ちょうど昨日、オーケアノスへ、立派なアイティオプスたちのところへお出かけなさつて、神様がたもみな、それについておいででした。それでこれから十二日目にオリュンポスへ渡つておいでになろう。そしたらその時、おまえのために、青銅を敷いたゼウスさまのお館へ私が出かけていつて、お膝にすがつて願つてみましよう、きつと説きつけられるだろうよ』」
「こういい終える、女神は去つてしまわれた、アキレウスは、そのままそこに取り残されて、美しい帯をしめた女のごとで、なお胸中に腹立ちつづけていた、人々が無理矢理に、彼の承知

もまたないで奪つていった女である。一方、オデュッセウスは、聖い大贄を船に載せてクリュセーに到着した。それで一行がとうとう深く水をためた入江の中へはいつてくると、帆をまづ下ろして、黒塗りの船の中へ収めて置き、それから柱の前の張り綱を引いて帆柱を受け木にたぐりよせるのも、すぐさまに、船を泊り場へと、樁を使つて漕ぎ進めた。それから重しの石をいくつも投げ込み、ともづなを固くいわえつけてから、今度はみなみな乗組員自身が、海の波打ち際へと降り立つて、遠矢を射るアポロイン神への大贄の牛を降ろせば、クリュセーイスマも大海を渡つてゆく船から外へ降り立つた。それから彼女を祭壇のところへ連れていつて、知恵に富んでいるオデュッセウスは父神官の手に渡し、彼に向かつていうようには、
「おお、クリュセーイスマよ、私を差し遣わしたのは武士たちの君主アガメムノーンだ、娘をあなたのところへ連れてゆき、またポイボス・アポロインに聖い大贄をダナオイ勢のために執りおこなつて、神意をなだめまいらせようとてである、今しもアルゴス勢へと、嘆きに満ちた禍いをつかわされたので」
こういつて、手渡してやれば、神官も喜んで

- 1) ネーレウスは古い海神で、多くの娘ネーレイデスを持つ。アキレウスの母であるテティスの父とされている。
- 2) ヘクトールの妻アンドロメケの父で、トロイアスのテーベの領主。このときアカイア軍に殺された。
- 3) 黒人族で世界の南方の東西両端に住んでいると考えられていた。世界の周辺を取り巻いてオーケアノスの大河があり、これは神格化されてティタンの一人と見なされた。

いとしい娘を受け取った。それから人々は、すぐさま御神へと聖い大贄の牛どもを、立派につくり上げた祭壇のまわりに順序よく並べ立たせ、それから手をすすいだうえ定式の割麦を手に取り上げると、みなみなのためクリューセースは両手を差し上げ、大きな声で祈っているよう、「お聞きください、銀弓の御神、クリューセーの町に護りをめぐらせ、神聖なキルラやテネドスを残威も高くお治めになる御神よ、いかさまことに、これまで前に私の祈りをお聞きくださり、私をだいにしてくださって、アカイア方の兵士たちに大損害を与えてくださいました。そのように、今度もまた何とぞ、私の願いをかなえてくださいませ、今はもうはやダナオイ方から、このむごたらしい疫病をお払いのけにな

(五五)

ってください」
こう祈りながらいうと、その願いをポイボス・アポロンはお聞きになった。さて人々は祈願を終わり、定式どおりに割麦を振りかけてから、まずまづ先に犠牲の牛の頭をひき上げ、のどを切り裂き皮を剥いでから、両腿の骨を切

りあげたうえ、全部を火から取りおろした。このようにして仕事が終わる馳走の支度がすつかりできあがると、食事にかかった、申し分ない饗宴には、何一つ望んでも足りないところはなかった。それから今度はもう十分に、飲み物にも食べ物にも満ち足りると、若者たちは混酒器にみなみなと酒を注ぎからし、杯を執り、まず神へと灌ぎまいらせながら、順ぐりに皆の者へ注いで廻った。こうして一日じゅうアカイア人の若者たちは、アポロンへの頌歌を美しく歌いつづけ、神意をなだめまいらせようと、遠矢の御神をたたえまづれば、御神もそれをきこしめて心を慰められた。

さて太陽が沈んで暗闇が襲ってきたとき、まさしくそのとき人々は船のともづなのそばで眠りについた。それから早々と明ける、ばら色の指をした暁が現われると、その折に人々は、広やかなアカイア勢の陣営に向かって帰っていった。その連中へと、遠矢を射るアポロン神は、ありがたひ追風を送られた。人々は帆柱を立て、上に白い帆を揚げ並べる、その帆のまんなかへ風は吹き込み、これをふくらませる、また舟底の先、両側には、船の進みにつれて、波が湧き立ち、大きな叫びをたてつづけた。こうして船は波あいを、ひた馳せに馳せ、道程をつづめていった。さて広やかなアカイア方の陣営にとうとう着くと、みんなして黒塗りの船を陸へと引きずり上げた、砂浜のうえに高々と、その下には長い枕木をいくつも並べて置き、こうしてから、自分たち自身はめいめい、それぞれの陣屋

や船のあるところへ散らばっていった。
(五六)
一方、あの人、ゼウスの裔で、ペーレウスの子の、足の速いアキレウスは、依然として、進みの速い船が並べてあるかたわらに坐り込んだまま、腹立ちをやめないでいた。それであつた、武士に名誉を与える会議の席にも現われず、戦いにも加わらないで、ただ一つところにじつとしていて、自分の胸を苦しめていた、しかも戦さの雄叫びや合戦やにこがれてはいたのだった。

さてその日から数えて、ちょうど十二日目の朝になると、ちょうどその日に、オリュンポスへと、永劫においでになる神々たちは、皆々一緒に、ゼウスを先頭に帰って来られた、するとテティスは、自分の息子(アキレウス)の頼みごとを忘れていずに、大海の波をくぐって浮かび出た。それで朝早くから、高い大空のオリュンポスの峰へと登ってゆくと、ゼウス神、あのはるかな空までとどろきわたるクロノスの御子が、ひとりして他の神々から離れ、尾根のたぐさんあるオリュンポスのいちばん高い頂きに坐っておいでなのを見つけ、すぐさま御神の前へすすんで坐るなり、左手で御膝にとりすがり、右の手では御神のあごの下辺を抑えながら、祈願をこめてクロノスの御子、ゼウス大神に申し上げるよう、
(五七)
「ゼウス父神様、ほんとうにもし私が、不死でおいでの神々のうちで、言葉なりまた所行なり、いつかお役に立ったことがありましたら、この願いばかりはおききくださり、私の息子に